

〔論 文〕

シルクロード学概論 (Ⅱ)

高 橋 庸 一 郎

はじめに

中国新疆省で最も多くの人口を誇っている民族は、おそらくウイグル族であろう。私が始めてウイグル人に会ったのは、1970年の4月であった。当時日本と中国の間にはまだ国交というものが開かれておらず¹⁾、中国へ行く日本人は皆中国から発行されるインビテーション（招待状）を前提として、日本政府がその用件に限ってのみ発行する、一回限りのパスポートを持って、その時はまだ中国領ではなく、イギリス領²⁾であった香港を必ず経由して深仙から汽車で広州へ入境していくのであった。当時の香港側の係官はイギリス人で「お前は大丈夫か？ ひょっとしたらもうここには帰ってこれないかもしれないぞ！」と本気とも、冗談ともつかない雰囲気を選びた言葉を我々外国人は背に浴びながら、国境の橋を渡っていったのであった。事実当時中国に行ったままそのまま抑留されて何年か帰ってこれなかったという商社員の親子もいたのである。ただこの親子については後に、周恩来が直接謝罪したという話も伝わって来たが、ことの真相は当時もはっきりしなかった。その時私は、その抑留された商社の親子と同様に、日本の友好商社³⁾の社員として、毎年春秋二回広州で開かれる「中国輸出商品交易会」⁴⁾に必ず出席していたのであった。この「交易会」は当時中国が外国向けに開いていた唯一の公認の貿易窓口であった。中国は当時所謂共産圏の主要な国の一つであったから、公には自由圏の国々と貿易することが出来なかったのである。そのために香港に近い広州で、一年

に二回、春と秋に、貿易上のネゴシエーションのための大々的なイベントを開き、自由圏との貿易はすべてこれを窓口として行っていたのである。そのためこの「交易会」には当時まだ国交の無いアメリカをはじめとする欧米の自由主義国家、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア、などの主要な国々はすべて参加していたのである。中国は当時、貿易にはとても熱心であったから、各省政府や各人民公社の幹部なども、この会に参加し、自分たちの省や人民公社⁵⁾からの出品物についての紹介や説明なども担当していたのであった。

そのためこの時期になると広州の町には、所謂欧米系の外国人の姿が目につくばかりでなく、中国国内の各地、新疆省や雲南省、モンゴル自治区などからやって来たのであろうと思われる人々も結構目につくのであった。当時の所謂中国人、漢民族はまだ中国全体の経済状況がさほどの発展を見ていないということと、解放後間もないということもあって、女性のスカート姿はまったく無く、男女ともに上下紺色の所謂人民服か、上下共にカーキ色の、人民解放軍のお下がり風の服を着ていたのであった。その点から言えばこうしたイベントに参加するために中国国内の各地方からやってくる少数民族の人々の衣装は、比較的色鮮やかで華やかな衣装を着て、まさしくこの時期は広州の町全体がいささか華やいで見えるのは、あながち外国人がよく目につくとか、人口が少し増えるということだけではないのである。

中国の少数民族の中でも、ウイグル族の衣装は特に華やかで目立つほうである。

1970年春、「交易会」の合間に広州の一番の繁華街であった北京路を散策して歩いていた時、五六人の、それぞれ違った模様のウイグル矢絣の服をまとったウイグルの娘さん達が、何を言っているのか解らなかつたが大きな声でしゃべりながら歩いているのに出会った。傍にいつも「交易会」の会場でお世話になっている、よく各種民族の言葉を解するといわれている漢族の女性がいたので、思わず「あなた方は、あの歌好き、踊り好きのウイグル族ですか?」とウイグル語で聞いてもらったのである。すると驚いたことに、当時の中国はまだ車はほとんど通ってはいなかつたとはいえ、目抜き通りの真ん中で突然彼女たちはこっちに向かってにこやかに笑うと、突然一人が歌い出し、後の人々が大道のまん中でスカートの裾を翻しながら踊り始めたのである。すると周りにいた漢族の人々も集まってきて輪になって彼女たちを取り囲み、喜んで手をたたき、賞賛の声を上げて、あたりは一大「聯歓会」のイベント会場となつたのであつた。

このときが、私がウイグル族と接した最初である。私はもともとウイグル族について何も知らなかつたのであるが、「交易会」の会場で、漢族の青年に、「ウイグル族は、キリギリスであり、漢族は蟻である。ウイグル族は毎日歌ったり踊ったりして楽しく生きているが、自分たち漢族の、熱心で勤勉な労働があるからこそ彼らも生きていけるのだ。」というのを聞いていたから、ウイグル族というのは、音楽歌好き、踊り好きであるということだけは知っていたのである。

このときから私はこの広い中国にも「社会主義思想や毛沢東思想でしっかりと武装した人々」ばかりでなく、結構いろんな生きかたをしている人々や民族がいるのであるということに身を沁みて感じたのであつた。そしてこの時から中国の少数民族とその文化に興味を持つことになつたのである。

I ウイグル人の文化とシルクロード

ウイグル族は、モンゴル族が草原の民であるのに対して、オアシスの民である。中国新疆ウイグル自治区の最大の都市、ウルムチは砂漠に囲まれたオアシス都市である。此処はもともとウイグル族と、ほかにカザフ族⁶⁾、ウズベク族⁷⁾、キルギス族⁸⁾、タジク族⁹⁾などのオアシス系の少数民族が住んでいた所で、漢民族は殆ど住んでいなかったのである。しかし当時、ウルムチの北東部には、新たに開発区が作られて、多くの漢族が住み着いて街を形成し、ウルムチという都市を拡大するのに一役かっていたのである。二十一世紀にはいると中国中央政府は「西部大開発」¹⁰⁾というスローガンを大々的に掲げて、資本と人力を投入したようであるから、新疆の発展は今では更に眼を見張るものがあるに違いない。

所謂黄河文明には彩文土器や黒陶なども出土しているからその時代にすでに、南ロシアのスキタイ¹¹⁾を含めた西方民族との文明的な交流が始まっていたものと思われるが、それがどの程度のものであつたかはわからない。おそらく戦国末期から漢にかけて、所謂匈奴が西方から漢王朝の近くまで迫ってきて、漢王朝は強い圧迫を感じていたに違いない。秦の蒙恬¹²⁾が匈奴を討つたりしているし、漢の高祖も匈奴と戦って敗れたりしている。其の点から見れば、この匈奴の行動範囲は極めて広く、西方との交流もあつたであろうから、間接的ではあつたかも知れないが、匈奴のほうも、漢族に当然何らかの影響を与えたに違いない。しかし漢族が正式に西方を意識し出すのはやはり張騫の西方遠征からであろう。張騫¹³⁾は疏勒¹⁴⁾を超えて大宛国¹⁵⁾、大月氏¹⁶⁾のバクトラあたりまで行っているから、今言うところの東欧の近くまで行っていると考えられるであろう。疏勒は今もそうであるが、当時もおそらく基本的にはウイグル人の世界であつたであろう。

古代ウイグルは中国の史書では、丁零¹⁷⁾と呼ばれ、その後、鉄勒¹⁸⁾、高車¹⁹⁾、などとも

呼ばれた。このウイグル族がイスラム教化する以前に伝承し、残した文学に「ウコス可汗伝説」²⁰⁾というものがある。これは英雄ウコスが、東のアラトン汗や西のウルム可汗と戦い、これらを征服して、おそらくこの地域は西アジアであろうが、広大な大地を縦横無尽に活躍する物語である。ただこの物語の最後に、次のような話がある。

年老いたウコスはその領土を子供たちに分封し、三人の子供達は東方の地に封じ、あとの三人の子供たちは西方に封じた。そして前の三人の子供達が東方から拾ってきた金の弓を三つに切って、三人の子供に分け与え、あとの三人の子供達が西方から拾ってきた三本の銀の矢をそれぞれの三人の子供たちに与えた。そして彼等に、「三人の長兄は弓であり、弓は矢を射るものである。」「三人の弟は矢である。矢は弓に服従しなければならない」と諭したのであった。

この話はイソップ²¹⁾にもある話で、高昌王国²²⁾時代のウイグル人が残した文献には、残巻「伊索寓言」というものがあり、これがイソップ物語であろうと思われる。イソップは紀元前の人間であるから、それを高昌時代のウイグル人が知っていたとしても何の不思議も無い。そしてこの三本の矢の話は実は我が国日本でもよく知られている話で、よく似た話が戦国時代の毛利元就の逸話にも出てくるものである。つまりこの物語は何らかの経路を経て、すなわちそれがシルクロードであろうと想像されるのであるが、日本に渡ってきたのではなかろうか。

ウコスの物語は後にアラブ語圏にわたり、ウコスもアラーの神をこの上なく信仰するイスラム教徒となって、物語自身も「オグズ・ナーメ」²³⁾と呼ばれるようになるのである。またその内容もそれなりにいささかの改変が認められるという。この「オグズ・ナーメ」は、「ウコス可汗伝説」とはまったく別個に13世紀にトルファン²⁴⁾で発見されたのである。これはウイグル古典文学、「アルギナ・クンの詩」²⁵⁾、「英雄タン・アハ」²⁶⁾等の多くの口頭伝承文学作品

の中の一つである。この作品について、ウイグル人のウイグル文化研究者で、新疆古典文学研究学会の主席でもある、マイマイテイミン・ユスブ²⁷⁾ (買買提明・玉素甫)氏は、アメリカで行った講演の中で、

「『オグズ・ナーメ』は古代ウイグル語で書かれ、その内容と記述は、こうした物語が形成されうるような、ウイグル族がまだそのトーテム信仰に生きていた、まさしく考慮に値する重要な時代を反映している」

と述べている。この物語は、1870年代の終わりに耿世民によって中国語に訳され、1982年に新疆人民出版社から刊行されたのであるが、2013年現在、日本語にはまだ訳されていない。

この中に出てくる話が、イソップ物語から出ており、それが戦国時代の日本に伝わっていたと言うことは興味をそそられる。もちろん日本には戦国時代の1549年にキリスト教が伝来し、それとともに「イソップ物語」もほぼ同時代に日本にも「伊曾保物語」²⁸⁾として伝わり、愛読されるようになったとも言われる。しかし毛利元就の場合ほどのような経過を経てそれを獲得したかは明らかではない。大陸渡りということも決して考えられないことではないであろう。

Ⅱ ウイグル族と宗教

新疆ウイグル自治区に初めて足を踏み入れたのは1995年の春であった。ウルムチの新疆大学にお世話になったのであるが、ここの研究室に落ちてからすぐ一人の先生が訪ねてこられて、イギリス人の先生が明日、イギリスにお帰りになるから、駅まで送って行ってほしいということであった。最初は何のことも解らなかった。しかし後に解ったことは、このイギリス人の女性教師は、新疆大学の英語の教師として赴任してこられたが、授業の合間を利用して、学生達にキリスト教の宣教文書を、何回か配ったということであった。そうした行為は大学としては不適當であるのでそれが解るたびに注意し

たのであるか、あまり聞き入れてもらえないようであった。そこで、区政府に報告したところ、早速強制的に退去してもらうように、ということであったので、明日イギリスに帰っていただくということであった。解らなかつたのは、なぜこの地に赴任してきたばかりの、しかも外国人である私にその重要人物を駅までお送りする役が回ってきたのか、ということである。その理由はいろいろあったらしいが、一番大きな理由は、そうした宗教的に影響力のある「危険」人物について世話をするのは、中国人は不適當である、ということであったらしい。しかしこの人物は非常に感じの良い人で、駅までのタクシーの中で彼女はイギリスでの自分の苦勞話を熱心に聞かせてくれたのであった。此の時、新疆大学の担当者の説明では時の中国政府の方針では、「古来からある中国の伝統的宗教的信仰については、全く自由である。又その他の宗教の信仰についても、すべての人に信仰の自由は認められている。しかしそれは本人自身が何を信仰しようと自由であるが、其の信仰を他人に宣伝、宣教してはならない」というものである、らしいのであった。このイギリスの女性教師は、中国政府から認められた自分の職務の範囲を大きく逸脱し、しかも上記の規則にも反していると謂うことであった。「自分に認められた職務の範囲を逸脱している」という点は兎も角、「信仰するのは自由、しかし宣教は厳禁」という点は些か問題無しとしない。しかしよく考えてみると、例えば日本の「家の宗教」としての神道や仏教以外では、宣教なくしては信仰の受容はありえない。つまり宣教なき信教の自由はありえないのでは無いかということである。

此のイギリス人の女性教師はどれほどの程度に「職務を逸脱」していたのかは解かりえなかつたが、おそらくキリスト教についてのパンフレットを自分の宿舎や大学の門前で配布していたぐらいではなかつたか、と思われる。まさか各教室で信仰のためのチラシを配布すると謂うことまではしなかつたであろう。しかしこうし

た行動が、大学に雇われた英語講師の行動として、全く問題が無かつたとは思わないが、すぐさま国外退去というのは我々自由圏から来たものにとっては、些か厳格に過ぎるような気がしないでもない。

このことから、当時の中国は、あるいは今も、かも知れないが、社会主義国であると謂うだけに、宗教に対しては極めて神経質な面を持っている事は否めない。

ただこの事件は、ウルムチという中国領域の最も西の端で起こった事であり、しかも其処の多くの住民はウイグル族で、日ごろから何かと漢族との間に摩擦が絶えないし、事と次第によっては、小さな摩擦が一大暴動に発展すると謂うことも決して否定できない地域であるので、中国政府担当者も此の程度で収めておくのがよいと判断したのではなからうか。

もしこれが北京とか上海などであれば、此の程度では収まらなかつたかも知れない。

此の時、此の女性教師は国外退去ということで、其のルートはウルムチから列車でカシュガルそしてアラシャンコウ²⁹⁾まで行き、そこで国境を超え、其処からカザフスタンのアルマーティ辺りまで行くのであろう。此の辺りの人々はカザフ人であるが、嘗ては共産圏ソ連邦の一員として宗教的には締め付けも可なりきつたのでは無いかと想像されるが、此の頃になると可なりオープンで、彼等の多くはイスラム教徒とはいっても、信仰生活としては極めて希薄であった。此の辺りは地理的には草原と砂利砂漠が断続的に続く地帯で、人心的にも全体的には非常にオープンな所である。しかし考えてみると此の辺りは嘗てはシルクロード上の最も重要な地点であつたに違いない。この辺りを多くのそれぞれ異なつた品物と文化を抱えた人々が、それらを自分の体と頭脳に携え、またそれらの文化を馬や駱駝の背に乗せて、多くの困難、自然環境上の困難ばかりでなく、人種の違いによって起こる困難、つまり言語上の困難、風俗習慣上の違いによる困難、はたまた襲撃や略奪などに遭遇すると謂う困難、そして民族間

の大規模な争いや、戦争によって起こる困難など等、様々な障壁を乗り越えながら、それぞれの国境や支配領域の権益の狭間を乗り越えて、彼等は負の意味でも、正の意味でも交流を絶やす事はなかったのである。こうした交流のルートそのものがシルクロードなのである。そう考えると此の女性教師の味わったであろう困難も、現在に至るまで、シルクロード史上で絶えることなく演じられてきた交流史の一断面に過ぎないのかも知れない。

III 現代の東西シルクロードの文化交流の一場面

2002年夏、此のアラシャンコウから国境線を越えて、当時カザフスタンの首都であったアルマーティへ行った事があった。其の時列車がアラシャンコウの国境線上に着いて一旦止まると、非常に獐猛な感じの軍用犬と思われるセパード二頭が国境警備兵に伴われて突然車両に乗り込んできて、一人ひとりの乗客と其の荷物をかきまわったのであった。多少のいざごは有ったらしいが、結局は何事もなくカザフスタン側へ入ることが出来たのであった。しかし其処でまた動き出すまでに二時間ほど待たなければならなかったのである。この時の乗客の多くは、商業活動のために中国内から帰って来たカザフ人やキルギスタン人、ウズベキスタン人などであった。彼等は此の二時間ほどの間、五十人ほどいた男や女も駅近くのバーでビールや酒をあおって、歌い踊って、それはそれは楽しげに過ごしたのであった。そして二時間が過ぎると駅から係員が呼びに来て、その場はお開きになったのであったが、其処にとどまる人も結構多かったのを見ると、其のバーで、呑み踊っていた人々は、此処の地元の人々も結構いたようであった。ここでも現代シルクロードの交流の一端を見たような思いであった。いずれにしても此の辺りは、石ころ混じり（中国語では「戈壁」、所謂ゴビ砂漠の語源になったものである）の薄い草原砂漠で、こうした草原オアシスを舞

台として生活する人々は歌うことや踊る事が非常に好きであることは間違いない。

IV ダイダロスとタタラ

ギリシャ神話と日本の古代との関係について最初に言及されたのは、確か手塚山大学の松前健先生であった。松前先生はギリシャ神話に出てくるダイダロスという名と、『日本書紀』のタタラとは関係があるものと見なしたのである。ギリシャ神話の中のダイダロスとは、ヒュギーヌスの『ギリシャ神話集』で見ると

エウバラモスの息子ダイダロスは、職人の技術をアテーネーから授かったといわれているが、彼は、自分の妹の息子ペテルデイクスを高い屋根から突き落とした。ペテルデイクスが最初に鋸を発明したので、その技術の才をねたんだのである。この悪行のゆえに彼は追放され、アテーナイからクレータ島のミーノース王のもとへ去った。

とある。『日本書紀』の「タタラ」とは、「神代紀上」に出てくるもので、

故、即ち宮を彼処に營り、就きて居しまさしむ。此大三輪の神なり。此の神の子、即ち甘茂君等・大三輪君等、又姫踏鞴五十鈴姫命なり。又曰く、事代主神、八尋熊罴に化わり、三島溝織姫に通ひたまひて、或に云はく、玉櫛姫といふ、児姫踏鞴五十鈴姫命を生みたまふ。是、神日本磐余彦火火出見天皇の后と為る。

とあるこの神武天皇の后となった姫の名が踏鞴五十鈴姫なのである。この「踏鞴」³⁰⁾について大槻文彦は、「叩き有りノ略転、踏ミ轟カス義」とする。「倭名抄・鍛冶具」に、「踏鞴、太太良」とある。つまり是は鍛冶屋の使う、「ふいご」であるが、大きな鑄物を作る時には、口で吹いていたのでは間に合わないので、「ふいご」を足で踏んで風を送る、所謂「足踏みふいご」

ご」を使うのであるが、「踏鞴」とはこの「足踏みふいご」の事を言うのである。

最近では余り使われなくなったが、我々より少し前の世代では、「昨日の晩、暗がりの階段でタタラを踏んで、足を挫いた」などとよく言ったものである。暗がりで、階段の段がまだあるのにもうないものと思込んで空を踏んでしまうことを謂うのである。「足踏みふいご」が、空を踏むことによって風を送ることが出来るのと同じ、ということによって出来た表現である。

松前先生は、ギリシャ神話のダイダロスが、自分の甥に当るペテルデイクスを、其の優れた才を妬んで殺してしまった、恐ろしい人間、ということで、それが北欧の神話に出てくる、トロルの元になったのであろうと考えられた。なるほど、トロルは怪獣、怪物でありながら、何処かひょうきんで、憎めない無邪気さを漂わせているのは、其の背後に宗教的教義としての悪の権化である、悪魔を担っているわけではないからであろう。松前先生はこのダイダロスが、柳田國男が日本の昔話として言及された、ダイダラボウ、或はダイダラボッチの原型であろうと見なされたのであった。

松前先生は更に嘗てのソビエト連邦の、タタール共和国を作っていたタタール人³¹⁾もこの流れの中で考えられていた。「タタールの頸木」の語が残っているように、13世紀から15世紀にかけて、ロシアが蒙古人の圧政下に苦しんだ歴史があり、この時のモンゴル人は恐怖と憎しみを込めてタタール人と呼ばれた。是は丁度中国の元朝から明朝の初め頃に当る。中国では「韃靼人(タータン人)³²⁾」と呼ばれた人々である。この韃靼人は中国前漢、後漢辺りで中国領域を絶えず脅かした「匈奴」が其の祖であろうといわれている。そしてこの「匈奴」はまたモンゴル族の祖でもあるとされている。2002年の夏、中国内モンゴルの通遼市にある、内モンゴル民族大学に行った時に、モンゴル人の多くの先生が、モンゴルの祖は匈奴であるということに疑いを挟まなかった。タタール族は、現在中国で認定されている五十五の少数民族のうちの一つである。

表記は「塔塔爾族」である。主要な分布地区は新疆とされている。1997年の夏、筆者は新疆大学で何人かのタタール族を自称する先生方にお目にかかる機会を得たことがあった。其の時の感じでは、其の誰もが色白で、目は茶味を帯びて、髪はこれも茶味を帯びており、明らかにアジア人とは異なると謂う印象を受けた。其の時は余りタタール族についての知識が無かったと謂うこともあって、タタールとはロシア系の一支部らいに思っただけであった。一応タタール人の定義を中国の公式な見解として、『漢語大詞典』から引いて出しておく、次のようである。

「タタール族は中国少数民族の一つで、新疆省の各地に住んでいる。比較的集中して住んでいるのは伊寧(イーニン)、塔城(ターチョン)、烏魯木齊(ウルムチ)等の都市である。人口は四千人以上で、言葉はアルタイ語系突厥語族に属し、多くはイスラム教を信仰し、亦多くは商業、牧畜業や教育事業等に従事している。」

四、五世紀のヨーロッパを震撼させた、フン族は匈奴の祖先ともされているが、是にはいろいろ異論もあるらしいが、イギリスの古典文化研究学者、ED フィリップスの著した『草原の騎馬民族国家』では、

「これはずいぶん議論された問題で、今は同一民族と考えられている。匈奴が強固な集団を保って中央アジアにとどまり、それがフン族の先祖となったとは考えられないが、残存したフン族のいくつかの氏族が、北方の森林からのイラン系遊牧民およびモンゴロイド系と混血してフン族という新しい民族を作ったのであろう。」創元社「世界古代史双書4」昭和46年2月勝藤猛訳

とある。更に同書は続けて、「中国文献によれば、匈奴は多髯高鼻であるという。それに反してヨーロッパ文献は、フンがモンゴロイドで

あったと伝える。インド史にフンナとして現れるエフタル族の諸王は、貨幣にその肖像が見られるが、モンゴロイドではない。だからここでいえることは、中央アジアのフン族は混血した民族であると謂うことである。」

と述べている。フン族の足跡は、ハンガリー、フィンランドなどヨーロッパ各地に点在しているようである。この頃から既にヨーロッパでは北西アジアの民族は凶暴な民族として恐れられていたのである。その指導者、アッチラの死後その大帝国は崩壊するのであるが、ヨーロッパでは其の後も西北アジア勢力を恐れて、特に十世紀から十三世紀にかけてのモンゴル族の西征などをトルルに由来するタタルの襲来と呼んだのである。現在中国の新疆省に住んでいる「塔塔爾族(タタル族)」は此処に由来するのである。因みにやはり現在中国で、内蒙古、黒竜江省などに居住している「達斡爾族(タヤール族)」も恐らくこうした流れに繋がる民族名なのであろう。因みにタヤール族³³⁾についての『辞海』の定義は、「タヤール族、中国少数民族の一つ。人口12,13万人(1990年)。内蒙古、黒竜江、新疆省などに分布する。其の言語からいえば、アルタイ語系蒙古語族である。」とある。

しかしいずれにしても此の二つの民族については、其の人口が少ないと謂う点からでもあろうが、其の出自や、各民族の離合集散の過程や、古代文化の発生や変化、特に相互の影響関係などについての研究書が極めて少ない。それらは、これからの研究課題となるのかもしれない。

V トロルとダイダラボウ

ギリシャ神話のダイダロスから北欧神話のトロルの名が導かれてきたのではないかと書いたが、ここから松前先生は更に興味ある説を出しておられる。それは、是も前に書いたのであるが、トロルという怪物が何処となくひょうき

んで憎めない存在であると謂う点である。此処から先生は日本の昔話に出てくる、ダイダラボウ、或はダイダラボッチも結局はこのギリシャ神話のダイダロスに繋がるのでは無いか、という点である。

日本のダイダラボッチも、柳田国男の記述などを見ると、大男ではあるがやはり何処か悲しげで、憎めないと謂う存在である。トロルとダイダラボッチは、其処に何か同質のものを感ぜてしまうのである。そして更にやはり柳田国男の「一つ目小僧」³⁴⁾などを見ると、このダイダラボッチ伝説では、その足が大きく、彼が大地を踏みつけた跡は池になって残っていると謂うような話が結構ある。これは思うにやはりダイダラボッチが、大陸渡りの怪物、怪人であることを意味するものでは無いかと思うのである。

それから今ひとつ考えてみて面白いのは、タタルが「恐ろしい物」「恐ろしい人」を意味するものであるなら、その人々は日本には入ってこなかったとしても、その言葉に纏わる概念としては入ってきたのではないかと、思えることである。その一つがダイダラボッチであるとして、もう一つは「たたる(崇る)(タタル)」とか「たたり(崇り)」のどの語では無いかと思うのである。こうした語の由来経過はまだ解明されていないようではあるが、今一度考えてみてもいいのでは無いかと思うのである。

以上のような西方からの言葉の伝来があったとするなら、それは取りも直さず、所謂シルクロードを辿ってきたのに違いない。その意味でシルクロードが日本に齎したものは、案外思いもよらぬ方面にも存在しているのかも知れないと考える次第である。

注

- 1) 第二次世界大戦後、日本と中国が国交を結んだのは、1972年、田中角栄内閣のときである。
- 2) イギリス領香港が正式に中国に復帰したのは、1997年で、当時は「一国二制度」という形であった。
- 3) 当時はまだ日中の国交が無かったから、両国は公的な形で貿易関係を結ぶことは出来なかつ

- た。そこで当時中国側は「中国国際貿易促進協会」を組織し、その長であり、アジア・アフリカ連帯委員会主席であった廖承志と、日本側は「日本国際貿易促進協会」を作り、その長に、第二次岸内閣で通産大臣を務めたこともあり、当時全日空の会長であった高崎達之助が、1962年に「日中総合貿易に関する覚書」に調印し、所謂「日中友好貿易」が始まった。この貿易は廖と高崎の名のイニシアルをとって、「LT貿易」ともよばれた。
- 4) 「交易会」の正式な名前は、「中国出口商品交易会」で、1957年春以来毎年春秋2回、香港と地続きの都市、広東省広州で開かれた貿易のための展覧会である。これは「出口(輸出)」と銘打っているが、もちろん輸出ばかりでなく、中国側の輸入もこの会で取り扱っていた。
- 5) 「人民公社」は1949年に革命を経て新しい中国が誕生した後、農業の集団指導制が敷かれ、合作社が組織されたが、これは規模も小さく、範囲も狭いものであったので、政治的な活動単位にまではなりえなかった。そこでもっと大きな、力あるものを目指して、即ち農作業や農業生産、所謂農民組織としてばかりでなく、さらに広く政治活動組織としても強力なものとなりうるように、さらに非常に強力な人民政府の下での人民政治下部組織としても考えられるようになったものが、1958年から徐々に組織されるようになったのが人民公社である。この組織はソ連邦に対する修正主義批判や、文化大革命を経て、ますます強固に発展するかに見えたが、自留地、や三自一包制が進展していく中で、1980年代の初めから衰退し、結局は活動停止となっていくのである。
- 6) カザフ族 現在主に、新疆ウイグル自治区のイリハザク自治州、ムレイハサク自治県、パルクンハサク自治県などに居住する。文献的には古代紀元前二世紀頃から現れる烏孫がこれに当たるといわれる。十五世紀頃からハザクという一つの新しい民族として現れる。現在はアルタイ、イリ、ターチオンなどで遊牧している。言語は現代ハサク語を使用するが、これはアルタイ語系突厥語族に属する。宗教はイスラム教である。
- 7) ウズベク族 中国語では烏孜別克族と書き表す。新疆のイーニン、ターチオン、ウルムチ、ヤルカンド等に居住する。人口は1992年で14,456人。言語的にはアルタイ語系突厥語族に属する。以前はアラブ文字を使っていたが現在はハサク文字を使っている。宗教はイスラム教。商業、手工業、一部は農業を生業とする。
- 8) キルギス族 中国語では柯爾克孜族と書く。歴史文献では黠戛斯族等に三の異なった表記がある。総人口13,971人(1992年)主には新疆省キルギス族自治州などの地、及び黒竜江省の富裕県。主要な生業は牧畜業、農業、手工業などである。言語的にはアルタイ語系突厥語に属す。アラブ文字を基礎とした文字が有り、北疆の民に共通する事であるが、ウイグル文字に似た文字を持っている。ただウルムチ、カシガル、アトシなどの大きな都市に住むキルギス族は多く漢語漢文に通じている。宗教はイスラム教であるが、モンゴル族との通婚も多いので、ラマ教も結構広がっている。
- 9) タジク族 中国語では塔吉克と表記する。総人口33,512人(1992年)主に新疆省タシクルガンタジク自治県、ヤルカンド、ツオシン、イエチオン、ビシャン等に居住する。言語的には印欧語系イラン語を話す。独自の文字は無い。一部はウイグル文字、漢語漢文を使う。主に牧畜、農業、に従事。宗教はイスラム教。性格は勤勉、質朴、其の居住地区は犯罪率が最も低い。2007年タシクルガンでは小中学校の生徒達は、決まりとしてではなく皆民族衣装を着て、民族帽子をかぶって学校に通っていた。亦街であう人々は皆軽く挨拶をしあっていたのが印象的であった。
- 10) 西部大開発 一般的に言うところ、中国は東部沿海の都市部は人口密度も高く、工業も大きく発展しているが、内陸部、特に中央アジアや西アジアに当たる所謂西域は、「改革開放」からも取り残された地域である。そこで2000年3月中国中央政府は、「西部大開発」のスローガンを掲げて新疆省、チベット、四川省、西部内モンゴル、などの地方の経済発展を目指し、また東北の比較的早くから開発されてきていた工業地帯も活性化させ、中央部の山岳農業地帯の経済・工業の発展を図ったのである。
- 11) スキタイ人 紀元前6世紀から紀元前3世紀にかけて南ロシアに建国したイラン系の騎馬民族。紀元前6世紀には南ロシアに強大な王国を築いた。しかし3世紀にはサルマーテ族に東から攻められて解体した。スキタイ人は純金の工芸品を高塚の墳墓に多数残した。特に馬の工芸品に優れたものが多い。
- 12) 蒙恬 (?～前210) 秦朝の著名な勇将。祖父の蒙驁から秦の名将として仕えた。
- 13) 張騫前漢武帝の時代の人。紀元前2世紀の中ごろ大宛国や大月氏国に使いして、西部アジアと中国との間の交流の初めとなった。つまりそのころまだその名称は無かったが、所謂シルクロードの嚆矢といえるであろう。『漢書』には、「張騫李広利伝」があり、そのはじめに、「張騫、漢中人也、建元中為郎。時匈奴降者言匈奴破月氏

- 王、以其頭為飲器、月氏遁而怨匈奴、無與共擊之。漢方欲事滅胡、聞此言、欲通使、道必更匈奴中、乃募能使者。騫以郎中募、使月氏、與堂邑氏奴甘父俱出隴西。徑匈奴、匈奴得之、伝詣单于。单于曰：「月氏在吾北、漢何以得往使？吾欲使越、漢肯聽我乎？」留騫十余歲、予妻、有子、然騫持漢節不失。」とある。
- 14) 疏勒 『漢書・西域伝』に、「疏勒国、王治疏勒城、去長安九千三百五十里。戸千五百一十、口万八千六百四十七、勝兵二千人。疏勒侯、擊胡侯、輔国侯、都尉、左右将、左右騎君、左右譯長各一人。東至都護治所二千二百一十里、南至莎車五百六十里。有市列、西当大月氏、大宛、康居道也。」とある。
- 15) 大宛国 古代西域にあった国。中央アジアのシル河中流域、フェルガナにあったといわれる。『史記・大宛列伝』に、「大宛在匈奴西南、在漢正西、去漢可万里。其俗土著、耕田、田稻麦。有蒲陶酒。多善馬、馬汗血、其先天馬子也。有城郭屋室。其属邑大小七十餘城、衆可数十万。其兵弓矛騎射。其北則康居、西則大月氏、西南則大夏、東北則烏孫、東則扞罽賓。于罽賓之西、則水皆西流、注西海；其東水東流、注塩沢。塩沢潜行地下、其南則河源出焉。多玉石、河注中国。而楼蘭、姑師邑有城郭、臨塩沢。塩沢去長安可五千里。匈奴右方居塩沢以東、至隴西長城、南接羌、隔漢道焉。」とある。
- また『漢書・西域伝』に、「大宛国、王治貴山城、去長安万二千五百五十里。戸六万、口三十万、勝兵六万人。副王、輔国王各一人。東至都護治所四千三十一里、北至康居卑闐城千五百一十里、西南至大月氏六百餘十里。北與康居、南與大月氏接、土地風氣物類民俗與大月氏、安息同。大宛左右以蒲陶為酒、富人藏酒至万余石、久者至数十歲不敗。俗著酒、馬著目宿。」とある。
- 16) 大月氏国 漢代西域中央アジア、アム河流域にあったという国の名。『史記・大宛列伝』に、「大月氏在大宛西可二千里、居媯水北。其南則大夏、西則安息、北則康居。行国也、隨畜移徙、控弦者可一二十万。故時彊、輕匈奴、及冒頓立、攻破月氏、至匈奴老上单于、殺月氏王、以其頭為飲器。始月氏居敦煌、祁連間、及為匈奴所敗、乃遠去、過宛、西擊大夏而臣之、遂都媯水北、為王庭。其余小衆不能去者、保南山羌、号小月氏。」とある。また『漢書・西域伝』には、「大月氏国、治監氏城、去長安万一千六百里。不屬都護。戸十万、口四十万、勝兵十万人。東至都護治所四千七百四十里、西至安息四十九日行、南與罽賓接。土地風氣、物類所有、民俗錢貨、與安息同。出一封橐駝。」とある。
- 17) 丁零 中国古代の北方民族呼称。恐らく今のウイグル族の呼び方であろうと考えられる。又「釘靈」「丁令」「丁靈」とも呼ばれ、表記される。秦・漢以前はバイカル湖の北に遊牧していたが、冒頓单于に率いられた匈奴に征服され、圧迫されて匈奴の一部に組み入れられた。匈奴が弱体化すると、丁零は南に遷り、鮮卑と一緒に漢朝に組み入れられ、何度も匈奴を打ち破ったが、結局は西に移ることになったのであった。後漢になると丁零の一部はモンゴル高原の南部に移った。魏晋南北朝になると丁零は長城の内外に移り住むことになるのであった。文献としては『史記・匈奴列伝』に、「後北服渾夷、屈射、丁零、鬲昆、薪犁之国。於是匈奴貴人大臣皆服、以冒頓单于為賢。」とある。その『正義』に「已上五国在匈奴北。」とある。また『索隱』には、「按：魏略云「丁零在康居北、去匈奴庭接習水七千里」。又云「匈奴北有渾窳国」である。また『漢書・匈奴列伝』に、「其冬、单于自将万騎擊烏孫、頗得老弱、欲還。会天大雨雪、一日深丈余、人民畜産凍死、還者不能什一。於是丁令乘弱攻其北、烏孫入其東、烏孫擊其西。」とある。また後文には、「其明年、丁令比三歲入盜匈奴、殺略人民数千、驅馬畜去。」ともある。
- 18) 鉄勒 中国古代の西北民族の名。又「勅勒」「赤勒」「鉄勒」とも表記される。南朝人はこの鉄勒を高車と呼んだ。この族は匈奴、鮮卑と丁零の一部の部落が融合して形成されたものであろうと考えられる。
- 19) 高車 前の注でも触れたように、南朝の鉄勒のことである。高車というのは、彼らが車輪が大きく高く、車の放射輻の多い牛車、馬車に乗っていたために付けられた名称である。全体的には北魏は高車と言い、南朝は丁零といったようである。
- 20) 『ウコス可汗伝説』 古代ウイグル族の間に伝承されていたと考えられる、英雄物語。ウイグル族は古代、文字を持たなかった。後にモンゴル高原にウイグル汗国を創設したころから古代突厥文字を用いて文献を書き残すようになった。840年ウイグル汗国は滅びるが、後にトルファン盆地に高昌王国を建て、そのころウイグル文を創制した。そのころの文献で今に残っているものの中に、史詩『烏古斯可汗伝説(ウコスカカン伝説)』がある。現在は1982年に、新疆人民出版社から中国語版が出版された。後にアラブ語で『オグズ・ナーメ』が出版されたが、これがアラブ語版『ウコス可汗伝説』である。ただし内容的に、両者は少し異なっている。つまりウコスが、前者では古代ウイグル的シャーマニズムであるのに対して、後者は敬虔なイスラム教

- 徒という設定である。
- 21) イソップ イソップ寓話集の作者といわれる、紀元前五六世紀ごろのギリシャの物語伝承家。詳細は分からない。ただ今我々が見ることが出来る所謂『イソップ物語』は、紀元前三世紀ごろ編集されたものに、その後何世紀にもわたって新たに作られた物語が付け加えられており、その原型がどんなものであったかは判然としな
- 22) 高昌王国 高昌の名は前漢期に起こる。当時トルファン県城の東側、勝金口の南側の二堡と三堡との間にあった古い都市及びその周辺を高昌とよんでいた。そこには高昌壁があり、「地勢高峻、人庶昌盛」とされたことによりその名が由来するという。
- BC108年前漢はトルファンの地をめぐって匈奴と争い、ここに始めて漢の中央勢力が入った。
- BC89年(征和四年)トルファン地区の車師王は漢に降り、漢領の一部となった。
- BC60年匈奴の日逐王先賢璿が漢に投じ、漢は西域に都護を置いた。こうしてトルファンは正式に漢に帰属することとなった。(高昌城の原型はほぼこのころつくられた)
- 後漢時期にも車師王国は依然として存在していたが、中央から増強派遣された漢軍が屯田駐軍して、匈奴と天山南北をめぐる戦いの重要な基地となった。
- 西晋(256~316)の末年、涼州の武威に居していた漢人張軌は前涼を号し、その孫張駿は位を継ぎ高昌を攻めて、ここに高昌郡を設けた。
- AD439年北魏は甘州の北涼を滅ぼし、沮渠無諱は西に移って高昌郡にとどまった。沮渠無諱の死後、柔然が天山の南北に達した。そこで漢人の闕伯周が高昌王となり、以後三度王は変わったが、趙氏高昌は140年間、北魏、隋、唐と密接な関係を保った。
- 640年(唐貞観十四年)趙氏高昌は西トクケツと連合して唐に叛き、その為、唐は高昌を攻めてこれを滅ぼし、西州都護府を置いた。その管轄は前庭県・交河県・蒲昌県・天山県と柳中県の五県であった。
- AD755年(天寶十四年)安史の乱が起こり、西域に対する中央の支配力が弱まったため、吐蕃がウテン、北庭、西州、龜茲等の天山南北の地を占有し、高昌もこの時吐蕃の管轄に帰した。
- その後ウイグルの首領僕固俊に帰した。
- 744~745年 キュ=ビルゲ=カガン
(懐人可汗)
- 747~759年 葛勒可汗(英武可汗)
- 759~780年 キュルク=ビルゲ=カガン
(牟羽可汗・英義可汗)
- 780~789年 アルプ=クトウルク=ビルゲ
(武義可汗)
- 791~795年 クトウルク=ビルゲ(奉誠可汗)
- 795~808年 キュリュク=ビルゲ=カガン
(懐信可汗)
- 808~821年 アルプ=ビルゲ(保義可汗)
- 821~823年 クチュルク=ビルゲ(崇徳可汗)
- 823~832年 アルプ=ビルゲ=カガン
(昭禮可汗)
- 832~839年 アルプ=キュルク=カガン
(彰信可汗)
- の時代をさす。この後840年キルギスがウイグルを攻め、848年漠北のウイグル汗国は壊滅する。しかしこの時ウイグルの一支が天山山脈北部の北庭一帯から、吐蕃(チベット)の領地を奪い、程なくして天山を越えて南下し、吐蕃の支配していたオアシスを領有し、そこに建てたのが高昌ウイグル汗国である。後にエンギ、クチャ、にまで領土を拡大したが、12世紀(1129年)には西遼に従属することになった。高昌ウイグル王 Barguk Art Tegin は自ら願い出てチングス汗のモンゴル帝国に帰属したが、功あったためにチングス汗の特別の優待を受け、旧の領域と国内の制度はそのまま維持することが出来た。13世紀後半40年にわたるモンゴル西北の宗主ハイドウの反乱が高昌ウイグル王国に致命的な打撃を与え、1270年高昌王国の首都ベシバリは反乱軍の手に落ち、国王は高昌を退いて甘肅省の永登県に亡命した。こうして高昌王国は1284年に滅び、その領域はチャガタイ汗国に併入された。
- 840年ごろキルギスにせめられたウイグル人は西遷し、天山南麓を支配するようになった。しかし残ったウイグル人は潰滅したが、このとき一部のウイグル人は甘肅地方に定住し、甘洲ウイグル、沙洲ウイグルと呼ばれた。其の後西ウイグルは高昌に拠り、高昌ウイグル汗国を作った。
- 23) 『オグズ・ナーメ』(Okuz Name)『オクズ=カガン説話』とも言われる。この祖形は13世紀頃ウイグル語で記録されたもので、中国新疆では『烏古斯可汗伝説』或は『烏古斯可汗伝』と呼ばれる。現存する唯一のウイグル語写本は、パリの国民図書館(Bibliothèque Nationale)にあり、所謂 Chy.Schefer 収蔵本である。これは晩期古代ウイグル語に属するもので、ウイグル草書体で書かれているが、巻頭末尾に欠落があるもののほぼ全体をなしているものと思われる。毎頁9行、42ページからなる。この『烏古斯可汗伝説』はウイグル民族がまだ、イスラム化する前のものでウイグルの古代伝承を古体の

- ままの姿で残していると考えられる。しかしその後のカラ・コユンル朝のマフムド・イブン・アブド・アッラフの『トルコマン史』や1310年にラシード・アッディーンによってペルシャ語で書かれた『集史』等に取りられた烏古スは生まれながらの熱心なモスリムで、信仰の為に父親とも戦ってこれを滅ぼす、と言う完全にイスラム化した物語に変わっている。『オグズ・ナーメ (ウコスの手紙)』『オグズ=カガン説話』等と称される場合は、こうしたイスラム化以降の『烏古斯可汗伝説』を指していることが多いが、個々の場合は烏古ス (ウコス) についての物語というような包括的な書名として使われているのであろう。
- ウイグル族の古来伝承文学である『ウコス可汗伝説』が、時を経てイスラム圏に入り、それが『オグズ・ナーメ』と呼ばれるようになったといわれている。両者の内容は余り変わりはないようであるが、「ウコス」は古体を残して、極めてシャーマン的であるが、『オグズ・ナーメ』のほうは、アラブ語系の伝承で、主人公は非常に敬虔なイスラム教徒ということになっているらしい。
- 24) トルフアン 新疆ウイグル自治区の火焰山の麓にあり、ウイグル汗国のあった高昌の南側にあるオアシス都市。現在でもウイグル人が多く住んでいる。「オグズ・ナーメ」が発見された所はトルファン北、車で三十分ぐらいの処にあり、現在は「高昌古城」と「交河古城」があるということで、かなり有名な名所旧跡の一つとなっている。
- 25) 『アルギナ・クンの詩』 (Argins Kun Dastani) この書名は、ウイグル人の伝承文学研究家でもある、マイマイテイミン・ユスブ氏の『ウイグル文学史』にも見えているが、その内容はまだ他の言語に翻訳されていないようなのでよくわからない。
- ただ『集史』に取りられているモンゴル族の始祖発展の物語の一部にあるようである。アルギナ・クンとは、モンゴル族がトルコ諸部族に大虐殺された後、難を逃れた少数のモンゴル族が移住し定住した場所の名前である、そこからモンゴル族は大草原に発展していくことになる。『周書・異域・突厥伝』には、ほぼ同内容のトッケツに関する始祖発展の物語がある。ウイグルはこの物語を、自らの出自を跡付けるものとして重要視している。
- 26) 『英雄タン・アハ』 (Tung Ah BNatir) 上注『アルギナ・クンの詩』と同様な事情で内容不明であるが、中国語表記は 阿夫拉西雅普 で、トッケツ族の英雄の名前、ペルシャ語ではアラシャブと言う。
- 27) マイマイテイミン・ユスブ 1995年新疆省ウルムチで、ウイグル族文化研究所の所長の任にあった。それまでに何度かアメリカ、ヨーロッパに出かけて、ウイグル族の伝統と文化を理解してもらうための公演やイベントを手がけてきたという。
- 28) 『伊曾保物語』 室町時代に日本に入ってきた所謂『イソップ物語』で「天草本伊曾保物語」と呼ばれている。室町末期に口語訳され、天草で出版されたという。
- 29) アラシャンコウ 中国新疆ウイグル自治区の西端、カザフスタンとの国境にある町。草原と砂漠の入り混じった地域である。
- 30) 踏鞴 足踏みふいごのこと。昔鍛冶屋が強い火力を得るために、ただのふいごでは間に合わず、足で踏んでより強い風を吹き付けて、より強い火力を得た。
- 31) タタール人 中国語表記では、歴史文献としては 達達 答答 達韃 韃韃 答答刺 答答里 塔達 などと表記される。現代は「塔塔爾族」である。主に新疆ウイグル自治区の各地に居住している。イーニン、ターチョン、ウルムチなどである。使用言語はアルタイ語系突厥語族に属している。また文字としてはアラブ語を基礎とした文字を持っている。宗教は、イスラム教徒が多い。
- 32) 韃韃人 前注31)のタタール人のことで、歴史上の一表記である。
- 33) タラール族 中国語表記では「達斡爾族」である。中国公認の少数民族。歴史上では 達古爾 達呼爾 等と呼ばれた。主に内蒙古自治区、黒竜江省と新疆ウイグル自治区などに居住している。十七世紀以前は黒竜江上中流域、チンチリ江一帯に居住していた。氏族を単位とした村を作って、ヤクサ、トキン古城を形成した。主に農業、牧畜、狩猟などを生業としていた。十七世紀の中葉、黒竜江流域からネン江流域と大興安嶺地区に居住を移し、ネン江平原の最も早い農業耕作者となった。主な宗教はシャーマンの多神教であり、一部はラマ教である。言語はアルタイ語系モンゴル語に属している。
- 34) 『一つ目小僧』 大正六年八月「東京日日新聞」に連載されたもので、柳田國男の作品。現代では角川文庫で、『一つ目小僧その他』のタイトルで、昭和四十九年に発行されている中の一つにある。

(2012年11月22日掲載決定)